

大阪府 和泉市立あさひ保育園 テーマ【「凜々子物語」～毎日が収穫～】

対象:5歳児 23名

辻林はやみ先生 玉田美希先生 古川光世先生

■ 活動のきっかけ:

園目標「安全、安心、地球にやさしい食育活動」のもと、「広がれ食育の輪、保護者とともに」をテーマに栽培活動のひとつとして「凜々子」の栽培に取り組むことにした。昨年までは、園の菜園で「凜々子」を栽培していたが、食育活動は収穫の喜びを親子で味わうことも重要と考え、今年は一人一鉢ずつ家庭に持ち帰り、親子で収穫してもらおうと考えた。ただし、保護者によって栽培の得手不得手があるため、実がつき収穫の目途がつくまででは園で育てることにした。

■ 活動のねらい:

- 親子で栽培活動に取り組むことで、家庭での食への意識の向上につなげる。
- 自分の苗を育てることで、愛情や思いやりの気持ちを養う。
- 自分が育てたものを調理して食べることにより、食べものに対する感謝の気持ちを持つ。
- 栽培を通してエコ活動を知り、身近な環境への取り組みに気づく。

■ 活動の流れ:

① 家庭と連携し、親子で一緒に育てる

5月19日に降園時を利用して親子で一緒に苗を植えてもらった。また、園からのお便りで「凜々子」の栽培についてお知らせをするとともに、6月上旬の保育参観でも食育について話し、保護者の理解を深めた。

毎日の水やりは、家庭で出る米のとぎ汁など入れたペットボトルを持参してもらうことにした。園で用意した水やり専用の袋に子どもたちに絵を描かせ、誤飲しないよう留意した。(写真右) 子どもたちは、毎朝うれしそうにペットボトルからジョウロに水を移し替えて水やりをしたり、苗の変化を見つけては保護者に報告したりと、親子で一緒に苗の生長を見守る姿が多く見られた。



② トラブルに負けない子どもたちの深い愛情

実がつき、そろそろ家庭に持ち帰る頃と思った矢先、尻腐れ症が多発した。トマトの栄養としてカルシウムをまくことや、尻腐れ果は摘み取ってコンポストに入れ、土に返すことなどを子どもたちに説明した。収穫の見通しが立たなくなり、鉢を家庭へ持ち帰ることを断念、収穫さえも保育士はあきらめかけたが、子どもたちは変わることなく、熱心に毎日の水やりや観察を続けた。その姿には保育士が励まされ、気温が上がると無事収穫できるようになった。



③ 収穫した分だけ「収穫表」に記録

毎日少しずつ収穫されるトマトは、その都度洗って冷凍庫で保存し、調理に備えることにした。また、保育室の壁に「収穫表」を貼り、収穫した実の数だけ、紙で作った「凜々子」を貼りつけていった。収穫量が増えていく喜びを全員が実感することができた。



④ みんなで「凜々子」を調理して食べよう！

9月1日に収穫した実でトマトケチャップ作りに挑戦した。冷凍しておいた「凜々子」の皮をむき、煮込む時は交代で混ぜるなど、全員で調理し、できたケチャップをウインナードッグにのせて完成させた。自分たちで大切に育てた「凜々子」で作ったケチャップを、みんなでおいしく味わった。



■ 活動によって得られた成果:

- 収穫体験だけでなく、日々の苗の違いを発見することこそが学びであった。自分が育てているものをいとおしく大切に思う気持ちがどの子どもたちの心にも芽生えた。
- 尻腐れ症になり摘み取られた実も多かったが、子どもたちは最後まで諦めることなく栽培を続けることの大切さを実感することができた。また、食べ物と栄養と自分たちの体の関係に興味をもち、健康の大切さへの理解を深めることができた。
- 調理を通して、「凜々子」の命をいただいていることに感謝したり、自分が育てた野菜を調理して味わう達成感などから、食への意識を高めることができた。
- 栽培を通して、エコ活動に興味や関心を持つことができた。また親子で取り組むことで、家庭との連携も深まった。

■ モグモからのメッセージ:



園の目標に沿った明確なねらいがあったからこそ、一つ一つの活動がとっても充実しているね。家庭との連携、エコ活動、トラブル対応、調理など、保育園で取り組むには難しいと思われる活動も、子どもたちがワクワクするような楽しい体験になっているよ！

先生のレポートにも子どもたちの発見や感動がいっぱい！ぜひ読んでみてね。

ぺんぎんぐみ「凜々子物語」“～毎日が収穫～”

毎日、登園時にはもちろん、園庭に出た時に子どもたちが真っ先に向かうのは、5月に



お家の人と苗植えをして育てている“凜々子”の所。送迎時、親子での肥料入れをする時も、お家の人姿を見るなり、「今から凜々子に栄養あげるんやで」と嬉しそうなお子たち。生長を楽しみにして毎日、家から

米のとぎ汁や野菜を洗った水をペットボトルに入れて貰い嬉しそうにジョウロに移し替えて、水やりも一生けん命です。



ある日、いつものように園庭に出た子どもたちが、大事件とばかりに慌てて保育士の所へ。「先生、凜々子に花咲いた!」、「黄色い花!」と大騒ぎ。クラス全員が“凜々子”の所へ集まり、「ほら、見て!かわいいやろ!」、「ぼくのも咲いてる!」などと、どの子も大騒ぎ!

今までも野菜の栽培は経験しているものの、今回はお家の人と一緒に植えたということと、また、実が成れば家庭に持ち帰り、家で収穫するという期待もあってか、今まで以上に、熱心に世話をしている子どもたち。私たちは、花が咲いた以上にそんな子どもたちの姿に感動し、子どもたちにとっては、毎日の生長そのものが収穫に値するほどの出来事・・・まさに、「毎日が収穫」なんだと実感しました。



実がつきだすと毎日が“凜々子”の話題に。普段の生活では、数=競争となりがちで、トラブルも多い子どもたちですが、「ぼくの実は3個」、「ぼくのは5個」、「わたしのも、もうすぐ実になる」などと、自分の苗についている実の数に満足したり、期待したりと本当にうれしそうな様子。子どもたちの自分の苗に対する愛着を感じずにはいられませんでした。



実が増え、収穫と思っていた矢先、実のおしりの部分が茶色になる「しり腐れ症」というカルシウム不足による病気になってしまいました。子どもたちには“凜々子”が病気になり、病気のトマトは摘み取ることを知らせ、様子を見ることにしました。「トマトがウンチしているみたい!!」という3歳児の声も聞かれる中、

大丈夫かなと心配そうに覗き込む日が何日も続きました。

そんなある日、「みんなのトマト、いつになったら赤くなるかなあ？」という保育士のつぶやきに、「せんせー、Aちゃんのいけてるでー」という子どもの声！その声に周りの子どもたちも「そうやで」「そうやで〜」と、口々に保育士に知らせてくれます。“凛々子”が病気になってからは、話題が少なくなっていたものの、子どもたちは毎日しっかりと観察していたのです。私たちは、子どもたちの言葉に励まされたような、元気付けられたような気がしました。

週明け、その実はついに赤くなりました。待ちに待った一つ目の収穫です。みんなで大喜びしたことは言うまでもありません。

翌日の七夕では、みんなで考えた、“凛々子”への思いを、「リリこがげんきになりますように」、「リリこが早く真赤になりますように！」と、短冊に書いてお願いしました。

短冊に“凛々子”への願いを書いて吊るしました。



「しり腐れ症」になって摘み取られた“凛々子”は、コンポストに入れて、土にかえます。

7月の後半になると、実は次々と赤くなり始め、収穫を喜ぶ子どもたちの姿も日ごとに増え、収穫表もにぎやかになってきました。当初は、収穫の頃、“凛々子”を家庭に持ち帰る予定でしたが、「しり腐れ症」のため、収穫が一律でないということでそのまま園で栽培を続けることにしました。その日採れた“凛々子”は、洗ってラップに包み、調理場の冷蔵庫で保存。こうしてケチャップ作りに備えました。

ケチャップ作りでは、解凍した凛々子の皮むきをしたり、煮込むときに交代で混ぜたりしましたが、大事に育ててきたという思いからか、いつになく熱心に取り組んでいた子どもたち。出来上がったケチャップは、ウイナーダッグに乗せていただきましたが、格別な味だったようで、どの子も「おいしい！おいしい！」と満足気でした。



毎日収穫したトマトは、保育室の壁面に作った『収穫表』にその数だけ紙で作った“凛々子”を貼り付けていきました。



ケチャップづくりの取り組み



解凍したトマトの皮は、簡単に手で剥くことができます。



トマトのへたを取り除き、大きくきります。



ミキサーで砕いたトマトをうらごしします。



煮汁が飛ばないように、手おいを付けてかき交ぜました。



出来上がったケチャップをウイナードッグにのせています。



「いただきま〜す！！」
みんなで作ったウイナードッグは、とってもおいしかったです。



“凜々子”は、ホットプレートで焼いて食べても、子どもたちに好評でした。

今回の“凜々子”の栽培を通して、子どもたちは命を育む素晴らしさや諦めずに最後まで取り組む大切さを実感したことと思います。この経験は、これからの子どもたちの自信や意欲につながっていくことでしょう。

病気になり、摘み取られた実も多く、残念でした。でも、そのことで子どもたちは食べ物の栄養と自分たちの体の関係について、栄養士や保育士に話を聞いたりする中で、興味を持ったり、健康の大切さも再確認できたことと思います。そして、自分が育てているものを愛おしく大事に思う気持ちが子どもたちの心に芽生えたこと、それが何よりの「収穫」だったように思います。